

長靴下のピット



夕刻にやっているBSAアニメ劇場が時たま目に入ってくることもある。相撲番組や国会中継の後にそのままにしている時などである。一年ほど前だったか「長靴下のピット」という愉快なアニメを見たそれが月曜の放映と知って、気がついたときにはチャンネルを合わせて来た。とはいえ四五回見たくらいのことだが。たしか外国の作品だったと思う。

左右不揃いの長靴下をはいた手足の長いピットは、超能力のある痛快な女の子。動物を味方に文明社会の外で大活躍である。特に初めて学校に行った場面は傑作だった。子育てを何十年前に終えて、童話やマンガから遠ざかって知らなかったけれど、本も出ていろいろらしい。というより本が先ずあったのことに違いない。

話は飛躍するが、この春わが家の庭に四匹の子猫を連れて野良の牝猫が現れた。薄茶色の美人ならぬ美猫なのだが、子猫は何と四匹ともわが家の牡猫ナスビと同色のセピアがかった黒である。ペルシヤの系統のふわふわした毛もナスビ譲りである。握り拳ほどの小さな体の四匹は、母猫の後からころころと走っては竹藪に消えていた。

ある雨の夕べ、外出から帰り車を車庫に入れて出て見ると、車庫の脇に丸めて置いてある葦簾の上にその子猫の二匹が長く伸びて死んでいた。外傷は何もなかった。夫を呼んで竹藪に埋めてもらったが、ふんわりして嘘のように軽かった。あとになって牝猫が目を光らせて何回も徘徊していた。

晩春の寒い雨の日が続いていた。ある朝、物干しの差しかけの下に二匹の子猫が身を寄せ合っているのが見つかった。しかしそのうちの二匹はもう死にかけていて、目を見開いて時折体を痙攣させている。このままでは二匹とも死んでしまふに違いない。

残る一匹をつまんで家に入ると、段ボールの小箱に

入れた。軽くて長い毛の下の背筋はヤスリのようにガリガリとして瘦せていた。もつ一匹のわが家の飼った猫アンに薬を飲ませる時に使う注射器で、その子猫にチンして温めた牛乳を飲ませ、電気あんかを箱の中に置きタオルをかぶせてその上に寝かせた。アンがまだ子猫で病気になる時、真夏の暑いさなかにも係わらず体温を求めて私の胸の上で眠っていたことを思い出したからである。

しかし子猫は下痢をしていて、目やにで目はくつきそつである。外では母猫が悲しげな細い声で泣いていたが、ここで外に出したら死んでしまつていない。

翌朝私はその子猫を川内の犬猫病院まで連れて行つた。受付で猫の名前を聞かれて、

「父親はうちの猫なんですけれど、母親は野良でまだ名前は考えてないんです」

と答えた。獣医の先生は

「ひどい栄養失調で風邪も引いている」

と言つて、注射をしたあと「目薬、飲み薬、栄養剤

を下さつた。しかしなかなか変化はなく、ぐったりしているところを叩くようにして目を覚まさせては子猫用のミルクを注射器で口に注ぎ込んだ。結局三回ほど注射をしていただいて、一週間後にやっとカリカリの餌を食べるようになった。

元気になるとこれがまた大変なおしゃべりの牝猫ちゃんである。私がいるとひっきりなしにニニニと話しかけ、膝に飛び乗り、ワープロのキーの上を駆けめぐるから、作りかけの画面が目茶滅茶になつてしまつた。改頁キーの上を走つて、折角打ち込んだ文を消してしまつたりする。またアンの爪研ぎ器に一人前に乗つてガリガリやる。これは本能なのだから。

この子猫は前足が左右色が違つた。左は母親のような薄いきつね色で、右は父親のセピアがかつた黒である。子猫のわりには手足がしなやかに細く長い。これはあの色も柄も違つた靴下をはいた長靴下のピッピーにそっくりだということだ。名前が「ピッピー」とした。

七カ月で避妊手術を受けた肥満のアンは、もうすぐ五才になるといつの日に、まだ子供である。初めのうちは、子猫を運するのにこわこわで、近寄ってくと逃げていた。ある日夫が

「アンと子猫が仲良くピンポン玉でじゃれあっているよ」

という。そのうちに長椅子の上でアンが胸に頬寄せて眠っているピッピーを見かけるようになった。永遠に母猫にはなれないアンが、少しは母親気分を味わっているのかもしれない。

実の母親の野良さんは、毎日私に餌をねだるようになった。野良にも以前のNO1・NO2とあってママ猫はNO3である。朝、タアンの食べ残しの餌を三匹の野良にばらまくのも私の仕事となった。何やら猫屋敷のオーナーになってしまったようだ。